

# Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.10 October 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
 解釈学的循環  
 /井上 昭洋 ..... 1
- 文脈で読む「身上さとし」(15)  
 明治 22 年 2 月～3 月  
 /深谷 耕治 ..... 2
- ライシテと天理教のフランス布教 (37)  
 21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑦  
 /藤原 理人 ..... 3
- 英語文献にみる天理教 (6)  
 D.C. グリーンの『Tenrikyo』(2)  
 /尾上 貴行 ..... 4
- 音のちから—中国古代の人と音楽 (22)  
 出土楽器が語る音の世界—漢代雑技の音響効果—  
 /中 純子 ..... 5
- ヴァチカン便り (70) (最終回)  
 エキュメニズム (教会一致運動) とカソリック教会  
 /山口 英雄 ..... 6
- 2024 年度公開教学講座要旨:『逸話篇』に学ぶ (10)  
 第 2 講: 114 「よう苦労して来た」  
 /澤井 真 ..... 7
- おやさと研究所ニュース ..... 8  
 比較思想学会第 51 回大会が本学で開催/天理台湾学会第 33 回研究大会が本学で開催/第 6 回 EASSR (東アジア宗教科学研究会) 年次大会に参加/International Conference on Indian Diaspora in Asia (アジアにおける印僑についての国際会議) に参加

## 巻頭言

### 解釈学的循環

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

解釈学は、古来、古典や聖書の解釈、法に  
 解釈の領域で発達してきたが、現代の解  
 釈学は、テキストにどのように接するか、  
 テキストをどのように解釈するかについて  
 考える学問と言える。テキストとは言うま  
 でもなく text の日本語表記 (カタカナ英語)  
 である。英語の text は日常用語としてはテ  
 キストと記すが、文芸批評や人文・社会科  
 学の分野では「テキスト」と表記すること  
 が多い。テキストであれば、文章や文献、  
 教科書 (textbook) を意味するが、「テキスト」  
 は文字に書かれたあらゆる言語的プロダク  
 ト (言語作品) を意味し、さらに敷衍して、  
 解釈の対象となりうる文化的産物までも含  
 む。人間の作ったモノ、言説や行動様式も  
 テキストとして解釈される。

ところで、現代の解釈学の基本的な問題  
 として提唱されてきたのが「解釈学的循環  
 (Hermeneutic Circle)」である。テキスト解  
 釈においては、全体の意味を把握することで  
 部分の意味を理解することができ、部分を理  
 解することで全体の意味理解が深まる。この  
 解釈における「全体と部分の循環的な相互作  
 用」を指して「解釈学的循環」と呼ぶ。この  
 古くから知られている解釈における循環作用  
 は、「全体と部分」の構成を組み替えて捉え  
 られるようになっていく。例えば、リクールの  
 「説明」と「理解」との循環、ガダマーの  
 「解釈する者」と「解釈されるもの(テキスト)」  
 との循環は、いずれも解釈の必然的な構造と  
 して循環的な相互作用を唱えるものである。

「説明」のモデルを自然科学ではなく記  
 号論に求めたリクールは、「説明」とはテク  
 ストの構造を表出させることであると言  
 う。構造言語学といった客観的な科学によ  
 ってテキストの意味 (sense) を露わにするこ  
 とが「説明」なのだ。一方、「理解」とはテ  
 クストが実のところ言及しているもの (non-  
 ostensive reference) を明らかにすることで  
 ある。テキストが言っていることを明らか

にするのが「説明」であり、テキストが何  
 について語っているのかを明らかにするの  
 が「理解」と言い換えても良い。そ  
 して、両者が止揚されたところに「解釈」  
 が立ち上がる、もしくは両者は「解釈」によ  
 って統合される。このように「説明」と「理解」  
 は解釈学的循環を構成するという。

一方、ガダマーはテキストを解釈する際  
 に「先入見」が必要であると説く。解釈者  
 は「先入見」なしにテキストを解釈するこ  
 とはできないのである。彼は「先入見」に  
 ポジティブな意味を見出し、テキスト解釈  
 のなかで「先入見」がたえず修正されてい  
 くプロセス、すなわちテキストと解釈者の  
 間でなされる相互の働きかけを解釈学的循  
 環と捉えた。それはまた、解釈者の先入見  
 の地平がテキストの歴史的地平と融合する  
 ことであるとし、それを「地平融合」とい  
 う言葉で表した。「地平融合」は、テキスト  
 と解釈者との間でなされる問いと答えの往  
 復運動であり、「対話」なのである。

これまで巻頭言では、人類学や宗教研究  
 における内と外 (インサイダー/アウトサイ  
 ダー) の問題や、人類学における「対話」  
 概念、フィールドワークにおける理解のあ  
 り方について考えてきた。これらの問題は  
 解釈学的循環の枠組みで捉え直すことが  
 できる。しかし、解釈学的循環は解釈の原理  
 であって、実用的な方法論ではない。それ  
 は、社会科学におけるナイーブな客観主義  
 や実証主義に警鐘を鳴らしてくれるが、具  
 体的な研究においてどのようにして“妥当”  
 な解釈を実現させるのかを示してくれない。  
 解釈人類学者ギアーツに倣えば、解釈は本  
 質的に論争に耐えうれば良い (essentially  
 contestable) ということになるが、そうであ  
 るとすれば、論争のなかで解釈を提示し続  
 けることによりその解釈だけでなく論争そ  
 のものも洗練させていくことが、私たちに  
 できることになる。

明治22年1月、増野正兵衛ら兵庫眞明組（兵神分教会）は「おさしづ」を通して教会設置のお許しを頂いた。その後、2月8日に増野正兵衛を会長にすることのお許しを伺ったが、「前々これまでの処話々してある。ぢば一つの理という。」というお言葉を頂く。おぢばへの移転は、正兵衛に再三論されていたことであった。その後の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・2月9日（陰暦正月10日）午前11時：清水与之助神戸分教会長に成ってくれと、講元始め周旋方よりだんへ申込に依て、御許し下さるや、清水与之助身上より伺
- ・2月11日（陰暦正月12日）：清水与之助分教会一条に付だんへおさしづを頂き、講社の談示致しとう御座りますに付、神戸へ帰ります事願
- ・2月17日（陰暦正月18日）：兵神分教会所地所の処はさしづせんと御聞せ下されし処、増野正兵衛より講社一同談示の上、神戸下山手通六丁目三十八番地村上五郎兵衛地所に致し度くと、皆心を揃えて定めしも、人間心を以ては相分り申さざる故一応清水与之助よりの伺／同日、神戸へ清水与之助帰るに付願
- ・2月28日（陰暦正月29日）：増野正兵衛齒浮きしに付伺
- ・3月1日（陰暦正月30日）午前9時30分：兵神分教会地所並びに東京出願の事、清水与之助、増野正兵衛兩名にて願／同日同刻、兵神分教会建築及神祀るに付願／押して、井戸一箇所御許し願
- ・同日午後1時30分：前伺の『なかへ遠く速やか一つ運び、一つ道』又『心と心と心にある』という理は、これは増野正兵衛生国長州へ帰りて神様の御話を伝える事でありませうか、又これは悟り違いでありますか伺

明治22年2月9日、清水与之助の身上の障りを通して「おさしづ」を伺った。内容は、清水が兵神分教会の会長になることへの御許しの伺いであった。「今一時成るよう行くよう運んで治める理が治まる、治まらん理が治まらん。」とお言葉があり、2月4日に頂いた「成るよう、行くよう。成らん道は通すとは言わん。」というお言葉と符合する。「初めあって一つ理始まるへ。」と元のぢばの理が示唆され、「治まる理を以て十分の理も治まる。」と論されている。こうしたお言葉を頂いて、会長は清水に決定された。

2日後の11日、清水は、兵神分教会に専心するために講社の人たちと談じ合いをするため神戸に戻ることを伺うと、「所は何処此処ともさしづせん。道のため一つ理が十分治まる。」と論された。そのお言葉を受けて、増野正兵衛をはじめとする講社の人々は談じ合いを重ねて、「神戸下山手通六丁目三十八番地村上五郎兵衛地所」を候補地にあげた。村上の地所について清水から伺うと、まず「それへの談示が大層思うからいかん。」と述べられて、談じ合いの姿勢について論されている。その上で、「初め一つ、元一つの理、世界のため人のためなら日々見え来る、月々見え来る。」と「元一つの理」についてふれられて、「皆んな一つの理なれば、十分の思いである。」と論されている。『清水与之助伝考』によると、村上は土地を貸し出すことを初めは承知しなかったが、

「ある夜、神官が自分の家を出入りしている夢をみて、貸すことを承知した。」ようである。<sup>(1)</sup>村上の夢を通して、実際に「成ってきた」といえよう。

10日ほど経った2月28日、正兵衛が「齒浮きしに付」伺っている。「なれどなかへ遠く速やか、一つ運び、一つ道十分理も分り来る。一つ心と心と心にある。」というお言葉があった。このお言葉について後に再び伺っている。

翌日、3月1日に、兵神分教会の地所と東京出願について清水・増野の兩名の名で伺っている。兵神分教会は、後3月13日に兵庫県知事より認可を得ているが、それに向けて東京本局管長の添書を得ようとしていた。「皆身上より運んで成程一つ安心、いつへ一つ心。」と、そもそも身上の障りで引き寄せられ、おぢばに運ぶようになったことを述べられ、「心分り難ないから、始め掛けたら一つ理、始め掛けたら治まる。十分運んで一つ十分守護。」と論されている。物事の治まりに関しては、この道を始められた親神の思いに沿うことの大切さを述べられているのであろう。

また、教会の建築、とくに神様をお祀りする方角について伺うと、「普請一条、方角どちらとも言わん。向もどちらとも言わん。大き小さいこれ言わん。大層思うからならん。皆心を寄せた理を受け取る。」と論され、井戸を設置することに関しても「心一つ、一時一つ心を揃え。これでこそ満足という。」と神の思いに人々の心を揃えることを説かれている。

その日の午後、前出の正兵衛の「齒浮き」の「おさしづ」について再び伺っている。「なかへ遠く速やか一つ運び、一つ道」や「心と心と心にある」というお言葉から、正兵衛は生まれ故郷に帰って神様のお話を伝えることか、と思索したようである。「遠くへ運び来たるという。何かの処十分運ぶ。一日一つ理を尋ね、一つ聞かす。」に、遠いところからおぢばに運ぶようにと論されていることが読み取れる。

#### 「齒・齒浮」

『身上さとし』では、2月28日の「おさしづ」について、「神戸より遠いおぢばに早く移転せよ。今は不安であろうが、やがてお道の理が十分解って来る。家内の者達（正兵衛・母・妻）の心を治めることが大切で、一名はこう思い一名はこうであるが、今一時お互いの心が治まるようにせよ。という意味で、齒浮くのは、皆の心を一つに治め安心させよ。ということを示されたのであろう。」と説いている。<sup>(2)</sup>

兵神分教会の会長も定まり、その場所も定まりつつあったが、正兵衛のおぢば移転はまだ定まっていなかった。正兵衛の文脈でいえば、齒や口中の患いはただ家内の人々の思いを揃えることではなく、やはりおぢば移転への神意に合わせることを意味していた。28日の「おさしづ」について、正兵衛自身は「生国長州へ帰りて神様の御話を伝える事でありませうか」と、おぢば移転とは正反対の思索をしていることが印象深い。

[註]

(1) 高野友治『清水与之助伝考』天理教道友社、1983年、196頁。

(2) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、109～110頁。

前回「さづけ」について書いたが、天理教の救済観に関連して、気をつけなければならない言葉がある。「おたすけ」である。「たすけ」や「たすかり」は日本語の解釈では治癒とも救済とも受け止められるが、フランス語は同じ単語ではない。治癒は guérison、救済は salut という訳語がふさわしいと思うが、仏和大辞典電子版では前者が「(病氣、精神的苦痛などの) 回復、治癒」で、後者は「安泰、救われる道、救済、救霊」とある。Salut は、不幸や危機から逃れるという意味もあるが、原罪や天罰からのたすかりも含め、より精神的な意味合いが強くなる。

天理教の「おたすけ」には、「つとめ」と「さづけ」という主に二つの救済手段がある。ともに魂の救済に寄与する行為だが、「さづけ」は病人を目の前にして行う祈りで、救済がその病人一人に向けられる。日々の「つとめ」はどこでも誰でも行うことができ、「さづけ」では願えない自分自身のたすかりから世界たすけまで、幅広く神の守護を願う祈りである。今回は、フランス布教の大きなポイントだと考えている「つとめ」について書きたい。救済から話を起こしたが、それとは関係のない展開になる事をあらかじめ断っておく。

外国における「つとめ」の課題は言うまでもなく歌と踊りであろう。言葉の意味も、動作の持つ意味合いも分からずに実践するのはかなり難しい。確かに日本語でおつとめを完璧につとめられる外国人はいる。しかし、日本の天理教信者で、十二下りのておどりをフランス語で歌って踊れるようにして下さい、と言われてどのぐらいの人が努力するだろうか。1時間ほど続く歌詞を覚えるだけでも大変なのに、踊りまで一緒に覚えるのである。10分ほどの座りづとめだけでも、フランス語で真剣に覚えようと努力する日本人はどれほどいるのだろうか。日本と同様先進国と言われるフランスで、おつとめは日本語で覚えなければならないと言われて奮起するフランス人はかなり少数だろう。フランスの人口は7,000万に届く勢いだが、おつとめをマスターした非日系フランス人が10年で数人出てくれば万々歳だと思う。教えに共感してもらっただけでも容易でないが、そこから更に日本語のおつとめとなれば針の穴を通すような難事になってしまう。

はたして教祖は日本語の「つとめ」にこだわったのだろうか。これはもはや答えのない問いである。結果論で言えば、日本で最初に広まったのだから日本語でつとめさせるつもりだったと考えるのが自然である。ただ、天理教は世界救済を前提とした陽気ぐらし世界の建設を信仰の目的としている。もし日本語でのおつとめにこだわるのであれば、宗教が衰退している現代の世相から考えると、世界たすけという目標はとても達成できないだろう。だが幸いにして、そうではない。韓国語のおつとめがあり、アメリカでも「歌って踊れるみかぐらうた」という英語バージョンのおつとめが作成されたと聞いている。音楽と踊りに合わせて歌詞を翻訳するのは気の遠くなる作業だと思うが、そこに費やされた時間と努力にただただ敬服するばかりである。

とはいえ、歌詞を翻訳しただけでは日本的な要素は残ってしまうだろう。服装は教服という和装ではない服でつとめているところもあると聞く。しかし、鳴物は日本の楽器であるし、節回しや舞踊そのものも日本的な要素が大いにあるだろう。つま

り、おつとめから日本的な部分をいっさい取り除けば、原型をとどめないほど別物に変容するに違いない。そう考えれば、言葉だけを翻訳して歌って踊れるようになっても、自分たちのアイデンティティとは異質のものを実践しているというフラストレーションはいつまでも拭えないのかもしれない。

聖地「ぢば」では、おつとめの第一節から第三節までの「かぐらづとめ」と呼ばれる部分は、世界創造の証拠として据えられている「かんろだい」を囲んで面をつけて立っておどるが、それ以外の場所では同じ形式で「つとめ」を行う事は許されていない。これは神の言葉である「おさしづ」によって指示されたことであり、人為的になされたものではない。このように第三節までの「かぐらづとめ」に特別な意味合いがあるのならば、教祖に教えられた言葉と手ぶりをそのまま使う方がいいように思う。第二節は外国人には相当難しいが、高すぎる壁ではない。そうすると、日々家庭でつとめる祈りも実践しやすくなるだろう。そして、人類創造の元初まりを象った重要な部分の「つとめ」を教えられたままに行っている、あるいは翻訳という人間の解釈を介していない祈りを捧げているという感覚も生まれるのではないかと。

そして、「かぐらづとめ」と同様の指図がなかった第四節「よろづよ」と第五節十二下りのておどりに関しては、歌って踊れる翻訳、楽器の変更、節回しや調の変更などを含めて積極的に異文化変容を許容してみてはどうだろうか。この部分が時間的に「つとめ」の大半を占めているので、外国人にとっても実践しやすくなるだろう。

座りづとめでは教祖が教えられた時代背景に想いを馳せ、立って踊る部分は自分たちのアイデンティティをおつとめに乗せて表現する。まさに教祖の世界と自分たちが生活する世界とが一体化するような、時間と空間を超越する「つとめ」にならないだろうか。

もちろん易きに流れることは良くないという考えもあるだろう。しかし、日本語の「つとめ」はあまりに困難過ぎる。そこから積極的に一歩踏み出す動きが起きなければ、世界たすけは絵に描いた餅で終わりかねない。

別の観点からも重要なポイントがある。フランスでもストレスに苦しむ人は多いという。既述したように、不安定な精神状態に付け入るカルト集団も消滅していない。他人の救済以前に自身の心の安寧を願う人は少なくないだろう。「つとめ」は、それらの人にとっても、遍在する神の恩恵をもっと身近に感じさせてくれる憩いの瞬間ではないだろうか。人間の体の中で神自身が身体機能として働いているという十全の守護の教えは、神と人間の間に厳然とした隔りがあるフランスでは重要な意味合いを持つだろう。そのような土地で天理教信仰を身につけるためには、十全の守護と「つとめ」の関連性を理解して、人体に宿る聖なる力を自ら感じ取れるかどうか、他の何よりも大事な課題となろう。近隣に天理教コミュニティがほとんどない環境下で「つとめ」の実践を諦めてしまったら、天理教の本質をつかむ唯一の術を失ってしまうとさえ思えるのだ。

以上の理由から「つとめ」の実践が天理教フランス布教の生命線になると考えるのである。

D.C. グリーン博士による天理教に関する論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え)は、明治28年(1895年)3月13日築地で開催された日本アジア協会の例会において口頭で発表された。その後、同月23日発行の『The Japan Weekly Mail』にその発表の要旨が掲載されている。これはグリーン論文が公の目に触れた最初であると考えられる。以下、同紙に掲載された記事の内容をみていく。

グリーン氏は、まず日本における神道について簡単に説明。神道は日本の宗教界において重要な位置を占めていると述べ、天理教はその影響力と急速な発展により、神道各派のなかで現在もっとも重要であると紹介した。そして日本の一般民衆の宗教状況やその心理的現象を知るうえで、天理教は大変興味深いと述べる。次にグリーン氏は、今回の研究を行うにあたり、天理教聖典の写本、東京や京都などの教会で行われた説教、天理教教師や布教師へのインタビュー、そして仏教や神道関係者による出版物などを参考にすると説明した。

続いて天理教の教祖みきに言及。教祖は日本の古都奈良から南へ6マイルほどのところにある三島村に住む農夫の妻で、1798年に生まれ1887年10月26日に亡くなったと紹介している(筆者注、1月の誤り)。ついで、天理教の神の顕現の様子について次のように説明した。教祖40歳の時、息子の足にひどい腫瘍ができ歩けなくなったが神への祈祷により治癒したという出来事があり、教祖みきは3日間昏睡状態に陥った。最後に彼女はひきつけを起こし、彼女の口から言葉が発せられ、それはクニ・トコ・タチ・ノ・ミコトという神によるものであると宣言された。しばしの静寂の後、ほかの9柱の神々が次々と現れた。みきはこれら10柱の神々の女性預言者とされ、この神々は自らをテンリ・オー・ノ・ミコトと呼んだ。これが天理教の始まりである。

グリーン氏は、教祖存命中天理教に対して世間から多くの激しい反対があったが、教祖が亡くなってから6カ月後には政府の認可が下り、それ以来急速に発展していると述べ、三島の神官によれば現在1万人の priests and preachers (祭司と説教者)がおり、信者は140万人に及ぶと説明した。そして、そのほとんどが下層階級の人々であるが、その団結心はこの教団の大きな力となっており、この一派の代表はここ数年国防のために5万円を政府に寄付することが出来ていると言われていると述べた。

そしてグリーン氏は、みきの教えによれば、もともとは単なる泥の梅であったこの世界は、10柱の神々の力によって創り変えられ、人間が住むようになったとして、彼女の説く人間創造について次のように紹介した。

(A)mong these the two first, Kuni-toko-tachi and Omotari no Mikoto, who represent respectively the moon and the sun, constituted the real source of creative power. Omiki differs from the orthodox Shinto writers, both as to the names and sex of these deities, but the pressure of public opinion had led to a revision of the original teaching in the interest of orthodoxy. After a time Izanami-no-Mikoto gave birth to 999,999 pigmies

six-tenths of an inch in height. These in the course of ninety-nine years grew to be four inches tall. They were followed by an equal number which grew to be five inches tall. Then Izanami died in great joy, because she saw in this advance the promise of a future race of men of five foot stature the fulfillment of the creative purpose. At this point, the direct agency of the Gods appear to have ceased, and similar pigmies of gradually increasing size were born in groups of ten, and later on in pairs. By this time the stature had become three feet. Thence the evolution went on until man reached his normal height and the world its present aspect. (この10神のなかの2神、クニ・トコ・タチとオモタリ・ノ・ミコトはそれぞれ月と太陽を象徴し、人間を創造する力の根源となっていた。オミキは正統派神道の著述者とは異なる神々の名前や性別を述べていたが、世論の圧力により正統派に添うように教えを修正した。しばらくして、イザナミ・ノ・ミコトは身長が1インチの6/10の小人を999,999人産んだ。これらは99年経って4インチまで成長した。彼らに続いて同数の小人はやがて5インチまで成長した。するとイザナミはこの成長の様子から、やがて身長5フィートの人間になるという人間創造時の約束が達成されると見て、大いに喜んで亡くなった。この時点で神々の直接的な働きは止まったようである。同じように徐々に大きくなっていく小人は一度に10人生まれ、さらにのちには一度に2人が産まれるようになった。その時までには身長は3フィートになっていた。その後も進化は続き、人間は現在の身長になり、世界も今ある形となった。)

グリーン氏が入手できた天理教の教義書は、写本(おふでさきの一部、筆者註)と印刷された12の聖歌(みかぐらうた、筆者註)などであり多くはなかった。教祖みきや教えなどを記した者たちは無学であったために記述が明瞭でなく翻訳作業は困難で、しばしば推測に頼るしかなかった。例えば、教義書の文体は、通常出版物で使用される文語体と地方の口語体を含む方言表記が混在していたからだ。

グリーン氏は、報告の最後にみきの説教(おふでさきの一部、筆者註)からいくつか引用し、次回の報告では聖歌、この一派の教義、そして礼拝と布教方法について発表する予定であることを述べ、今回の報告を終了した。

報告後の質疑応答では、出席者の一人が、以前にこの一派の教義はキリスト教の教えに影響を受けていると聞いたことがあるがそれは正しいのか、と質問をした。それに対しグリーン氏は、信者たちが明確に意識しているとは思えないが、この教えにキリスト教の影響が何らかの影響を及ぼしている可能性は十分あると考えられる、と答えた。こうして会合は5時半に終了した。

この3月の例会で報告された内容は、同年12月『日本アジア協会紀要』に掲載された論文のうちのおおよそ前半部分にあたる。『The Japan Weekly Mail』の紙面の都合で報告内容の要旨のみが掲載されていると考えられるが、教祖の生い立ち、神の顕現、そして人間創造の話に関して多く記述されていることから、当時の人々の関心度合いがうかがえる。

## 角抵戯とは

前回に述べた秦の咸陽宮の銅製の人形十二体は、『史記』秦始皇本紀によると、秦の始皇帝が各地から集めた兵器を溶かして、それで鑄造したものだ。金属製の兵器が使えなくなったためか、「民間の武芸や角抵遊戯は、素手で行う格闘技の方向へと移行し、角抵の内容が形体運動にいつそう重きがおかれ、これが民間雑技の発展に刺激となった」（傅起鳳・傅騰龍『中国芸能史』三一書房、1993年、38頁）とある。なるほど、格闘技をいう「角抵」の語は、秦代にすでに現れている（『史記』李斯伝）。また、秦代に「山東六国の舞楽の人材が秦の都咸陽に集められたことは、各地方の各種の技の交流と水準の向上に有利にはたらいた」（『中国芸能史』38頁）とも言われる。『漢書』武帝紀に「（元封）三年（B.C.108）春、角抵戯を作す、三百里の内 皆な（来たりて）観る」とあるものが、そもそも秦代に形作られていたことは、漢代に始められたとされる「楽府」という宮廷音楽機関が、前回にみたように実は秦代から存在したと軌を一にし、秦代文化が漢代文化の礎を築いた証しの一つといえよう。その角抵は、先の『漢書』の記載のように「角抵戯」と呼ばれることもある。格闘技であった角抵が、筋立てを持つ芸能となった。「戯」とあることから、角を持つ蚩尤が黄帝と戦う様子を模した「蚩尤戯」に由来するという説もあるそう（『中国文化史大事典』大修館、2013年、1043頁）。

## 夷狄を圧倒する技芸

さきほど引用した『漢書』武帝紀には、三百里のうちのものが皆な観に来たとあるが、漢代には、外国の使者をもてなす宴会で角抵戯が披露された。『漢書』西域伝では、その宴会を「酒池肉林」に例え、さまざまな出し物とならんで「角抵戯」がなされたとある。具体例をあげると、『後漢書』東夷伝の夫余国（今の中国東北部）の条に、「順帝永和元年（136）、其の王 京師に来朝し、帝は黄門鼓吹・角抵戯を作して以て之に遺る」（黄門鼓吹は、天子の近侍によって主に打楽器と管楽器によって宮廷で奏楽されるもの）とある。夫余国の王に漢の文化的レベルを知らしめたのである。

『後漢書』礼義志（中）には、正月の大宴会の様子が記されている。その注（蔡質『漢儀』）によると、この宴会は、天子が徳陽殿に行幸し、公・卿・將軍・大夫・そのほかの諸官僚が参集し、蛮・貊・胡・羌の諸蛮族が朝貢するなかで行われた。まず、舍利獸が宮殿の西側から現れ、庭で遊び戯れ、激しく流れる水中に飛び込む。それが比目魚となって現れ、さらに変化して黄龍となる。その長さは20メートル弱。また、大綱のうえを二人の女性がぎりぎり近づいても均衡をくずさず舞う。鐘と磬の音が同時になり、歌曲が終わると、「魚龍蔓延」という。小黄門は楽器で合図を三度鳴らし、観覧する者が退出して宴会は終わる（渡邊義浩ほか『全譯後漢書』礼義志（中）汲古書院、186・187頁参照）、とその魅力的な出し物が記されている。



この漢代の出し物の数々を視覚的に見せてくれるのは、「沂南北寨楽舞百戯画像石」後漢（沂南県界湖鎮北寨村）（『中国音楽文物大系・山東巻』2001年、314・315頁）である。

上図の左の端から、短剣を空中に投げる手技の「跳劍」、屈強な男が人がのる十字型の長竿を頭で支える「都盧尋幢」、その下では

長い袖の衣装の演技者が「七盤舞」を演じている。このひとままとりの演技の後方で、大楽隊が二段で編成されている。上段では高く設えられた太鼓を力いっぱい打つ奏者と、鐘や磬を打つ奏者、下段では、一列目は指揮をする楽士と鼓手、二列目は簫を主体とする吹奏楽器、三列目は琴笙合奏の管弦楽が配されている。

続いてその楽隊の右をみていくと、右の図のように旗竿を手に持ち、縄のうえで飛び上がる「走縄」が演じられている。



さらにその前面には漢代に最も流行したといわれる「仮装動物戯」が描かれ、舍利獸・鯉魚がみられる。先に『後漢書』で、「魚龍蔓延」といったのは、観衆の面前で舍利獸から比目魚へと複雑に変化する動物戯のことであるが、これはその変化を図示したものである。

ここには見えないが、さらに図の右は「馬戯」で、向かい合って駆ける馬の背に立つ人や、飛ぶ人が描かれている。さらには龍の姿に飾られた三頭の馬が引く戯車の高い柱の上で腰を湾曲して倒立する人に合わせ、車に乗る楽人が簫を吹き鳴らしている。

ここに描かれたものは左から順番に演じられたのであろう。筆者はこれまでそのスリル満点の演技に気を取られてきた。しかし、その演目が、「跳劍」などの個人芸から始まり、「走縄」「魚龍蔓延」などの数人の団体技を経て、スピード感のある「馬戯」に移っていくという構成の妙に驚く。

## 聴覚的効果

これらが目を楽しませるだけではなく、それぞれの箇所に、聴覚的に演目を盛り上げる楽人が描かれていることにも改めて気づかされた。李莘・杜楽『中国古代楽舞文化研究』（中国電影出版社、2015年、101頁）では、漢代の角抵百戯は常に楽舞と雑じりあい、楽舞の要素を帯びていたと述べられている。



音楽効果という点に目を向けると、倒立の演技が漢代から盛んにおこなわれてきたことを示す「済南無影山楽舞雑技俑」前漢（済南市博物館）（『中国音楽文物大系・山東巻』2001年、209頁）にも、演技者の後方に鐘や太鼓や、笙や瑟を奏でる楽人が並んでいる。これらはただの技芸披露ではなく、音響効果を計算して配置されたものと思われる。

日本にも遣隋使・遣唐使によってこうした雑技が招来されたことは、渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家』（文理閣、2013年）や、平間充子『古代日本の儀礼と音楽・芸能』（勉誠出版、2023年）に詳しい。ただ、漢代に中国を訪れた日本の使節も、ここで見たような技芸に圧倒されたはずであり、遣隋使・遣唐使よりも早い時期から日本でも雑技が文化的優位の象徴の一つと捉えられ、それらを効果的に盛り立てる音楽の整備の必要性も意識されていたとは考えられよう。

さらに、漢代に雑技の効果音を奏でるために、鐘・磬・太鼓・瑟・笙・簫などの楽器が総動員されて、さながらオーケストラのような構成となっていたことも、後世になると雅楽器・俗楽器・胡楽器と楽器の分類が厳格になされていくことを知るだけに、古代音楽のおおらかさの一端を垣間見るようで新鮮に感じられる。

## エキュメニズムをめぐる諸問題

カソリックとプロテスタントを含む西方教会では、2024年の復活祭は3月31日に行われた。しかし、ロシア正教会を含む東方教会では、復活祭の日は5月5日だった。ロシア人にとって復活祭はロシア文化の本質をなすものと考えられている。プーチン大統領はこの日、モスクワでキリル総主教が司式する教会に行き、復活祭の儀式に参列した。一方、イスラエルの聖墳墓教会はカソリックを含めた複数のキリスト教の共同管理である。今年の復活祭は格別なものとなった。カソリックは3月31日に復活祭を祝ったが、イスラエルの総主教は、同教会の聖体安置所に来た参拝者一同に、復活祭の聖火を与え、説教を行った。

カソリックの広がる西洋世界では、1582年からグレゴリオ暦を採用しているが、東方教会などは古代ローマ以来のユリウス暦を使用し続けているので、復活祭の日付が異なっている。1900年代に数回、暦を一致させようということで、全キリスト教会の会合がもたれたことがある。それは一種のエキュメニズム (教会一致運動) であるが、どの教派にも固有の伝統と主張があって、全面的に一致することはなかった。

これではいけないということで、コプト派の総主教であるエジプト人のタワドロスは、暦によって、各派それぞれの復活祭の日付が違わないように固定する必要があると主張している。ローマ法王フランチェスコは、カソリックで定めている復活祭の日付を、東方教会の復活祭の日に移し替えてもよいと考えているようだ。しかし、キリスト教会は現在、エキュメニズムについては、とくに強く考えていないようだ。どのキリスト教の会派もキリスト教の統一運動には積極的ではない。

一時期、その統一運動の機運が高まった時に、カソリックの第二ヴァチカン公会議が開かれ、教会一致運動が強調されたものの、その動きは今では止まっている。その背景には、各教派の「神学」の問題があり、またそれぞれの歴史、精神性によるところが大きい。コンスタンティノープルの大司教アテナゴラスは、エキュメニズムのために尽力したが、残念ながら1972年に亡くなってしまった。その時点で、各キリスト教会は、過去に互いに良好な関係があったとしても、教会そのものの統一には反対するようになっていたのである。そして今日、グローバリズムを背景に、各国及び各民族の主張、各宗教の特性が表明されるようになり、キリスト教会の統一や融合はかえってキリスト教の良さを損うようになるという意見になってきた。その代表的な例がウクライナ正教会の例である。

ウクライナ正教会は、2019年にギリシャ正教会の組織から分離独立した。これがロシア正教会の怒りを買ったのだ。そうした理由もあり、ロシア正教会は現在、プーチン大統領のウクライナ戦争を支持しているのである。またそのために、東方教会は相互につながりがなくなり、バラバラになってしまった。クレタ島で予定している全東方教会の会議の参加に、ロシアを含めた4カ国が拒否している。また同じ教派の中でも対立がある。例えば、ナイジェリアとウガンダの聖公会では、女性司祭を認める国々の聖公会を認めていない。またエチオピア教会は、国内の様々な問題や事柄に口を出し、国民の統合を妨げている。また、コンゴ民主共和国の教会もヴァチカンの同性愛をめぐる問題の対処に抗議し

ている。このように、ナショナリズム、民族問題、文化の相違などが教会一致運動の重石となっているのである。現在、来年の復活祭の日付の統一をめぐる話し合いがなされているが、それはエキュメニズムへの歩みの大きな一歩であろう。

## 民主主義や自然に対する法王の見解

現代では、民主主義の思想は多くの国で採用されている。自分は正しく、主の教えを実践していると思い、それでいて主に守られていると考える者がいる一方で、逆に自分は能力もなく、大きな社会的仕事もできないけれども、日々神の正義に従って生きていくと考える者もいる。表だって反体制的な意見を言えず、発言もできない社会や国も存在する。そうした時に、あえて言葉を発し、意見をいうことが大切だ。それが政治的愛である。

「民主主義の危機」と「勇気のなさ」について苦言を呈する法王の真意は、こういうところから考える必要があるようだ。「無関心というのは民主主義のガンである」と法王は主張する。「民主主義それ自体が単純に人民の投票に結びつくわけではない。私は選挙の時に、投票に行く人たちが減少していることを憂慮している。人民全員が参加できるような状況を作り出すことを願っている。そのためには、若者のためにも、社会構成、政治構成の多様性が必要である」と言う。法王によれば、一般の人が憲法を持っているように、キリスト教徒は聖書を持っているという。なぜなら、聖書こそ我々の生命に意義を与えてくれるものであり、それは真の民主主義への指針となる。

また、法王は自然軽視の傾向に対しても次のように語っている。

3,000年前の中国の農民、2,000年前のテッサリア (古代ギリシャの北東部) の平地に暮らしていた農民、イタリアのトスカナ地方の丘陵に住む住民、またサレント地方 (イタリアの国のちょうど靴のカカトにあたる) の人間は自然をいかに考えていたのだろうか。収穫の際にはきっと自然へ恩返しする必要があると思っていたはずだ。

3,000年前の北アメリカの猟師、また2,000年前のガリア地方の人間は、またガルファニャーナ (イタリア・ピザの北東地域) の山岳の住民は自然をどう考えていたのだろうか。日が短くなり冬が近づくと、自分たちを勇気づけてくれる存在のことを考え、寒さで死なないう、飢えに苦しまないよう、シャーマンは神々に祈ってきたのだ。

そこへキリスト教が入ってきた。キリスト教は、人々を自然から、宇宙的なものから切り離すために、精霊たちへの信仰を放棄するように、人々に主張してきた。霊を有するのは人間だけだ。神は人間を神に似せて創った。人間は自然を凌駕することになった。しかし、近年の異常気象など、自然の動きは、人間の知恵や力を超えるものが非常に増えている。

法王はそう警告し、今一度、私たち人類が自然を畏敬すべきことを主張しているのである。それはいかにも、アッシジのフランチェスコに名前をとった法王らしい主張ではないだろうか。

長い間ご愛読をいただいた「ヴァチカン便り」も終了の時がきました。この号をもってお別れになります。この間の編集者の忍耐と読者の皆さんの寛大さに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 第2講：114 「よう苦勞して来た」

## 114 よう苦勞して来た

泉田藤吉は、ある時、十三峠で、三人の追剥に出会うた。その時、頭にひらめいたのは、かねてからお仕込み頂いているかしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の理であった。それで、言われるままに、羽織も着物も皆脱いで、財布までその上に載せて、大地に正座して、「どうぞ、お持ちかえり下さい。」と言って、頭を上げると、三人の追剥は、影も形もない。

余りの素直さに、薄気味悪くなって、一物も取らずに行き過ぎてしまうたのであった。そこで、泉田は、又、着物を着て、おぢばへ到着し、教祖にお目通りすると、教祖は、

「よう苦勞して来た。内々折り合うたから、あしきはらひのさづけを渡す。受け取れ。」

と、仰せになって、結構なさづけの理をお渡し下された。

泉田藤吉は、天保 11（1840）年 5 月 10 日、泉田富吉の次男として現在の大阪府東成区大今里で誕生した。体格にも恵まれて力も強かったため手伝い<sup>てんい</sup>人夫をしたり、西国三十三カ所の札所をめぐる旅人のために強力、つまり用心棒をして、案内や荷物持ちをしたりして生活していた。

入信の契機は、明治 4 年 2 月頃、藤吉が 32 歳の時にさかのぼる。奈良の東大寺二月堂で行われたお水取りに参詣した折に、不思議な神様がいるという話を聞き、庄屋敷村へ足を延ばすことにした。その際、山澤良助から話を聞いたものの、信仰する気になることはなかった。そうした藤吉の入信は、胃がんを患っても好きな酒をやめることができず、もうたすからないとなつてからであった。旧来の仲であった山本伊平から「かしの・かりもの」の理を聞かされ、「好きがかたきで好きなもの止めねば助からぬ」と諭された。

藤吉は「はだしの講元」としても知られているように、入信後、草鞋が擦り切れてはだしで歩くほど、おたすけに奔走した。朝起きると頭から冷水をかぶり、身を清めてからぢばに向かってお願いし、おたすけに回った。明治 15 年、天恵組四番という講名を頂き、現在の北大教会、御津大教会、網島分教会、上町分教会、大江大教会、中津大教会の初代会長となる人々を道の信仰へ導いた。

藤吉はにおいが掛かると、夕方に大阪を発って夜通し歩いてぢばへ帰ったと伝えられている。官憲の目が厳しかった頃で、参拝すること自体が容易ではなかった。夜中の 1 時か 2 時頃にお屋敷に到着すると、床下にもぐって数時間の仮眠を取り、教祖や取次から一言二言の仕込みを受け、夜明け前にお屋敷を出て大阪へ帰ったと伝えられる。

藤吉の信仰の中心には、かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えがあった。かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えは「教えの台」と言われ、天理教の根幹を成す教理である。教祖に導かれた道の先人たちは、おたすけの場面で、かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教理、親神天理王命の守護、そして八つのほこりの説き分けを行っていた。藤吉もまた、身の内が親神からのかりものであることを山本伊平から聞いて入信し、自らもかしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>に基づいた話を通しておた

すけに奔走し、多くの人々を導いた。

かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えは、とりわけ天理教の死生観、すなわち生や死に対する天理教の教理と表裏一体である。天理教の死生観は、「出直し」という言葉で教えられている。今生において、人間は親神から身体を借りて誕生し、十全の守護を受けて生活している。このとき、人間の命（生）は親神が身体を貸しているあいだ（親神から身体を借りているあいだ）である。生まれ変わりを踏まえた身体観からみれば、天理教における人間の「死」とは、身体を親神に返した瞬間のみを指すのではなく、身体を返してから再び借りるタイミング、すなわち世界に新たに出直してくるタイミングまでと考えることもできよう。

このように考えると、私たちの生は毎日毎日、あるいは一瞬一瞬と言える身体に対する守護の積み重ねのなかに、初めて成立する。かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えは死をいかに受け入れながら、今日という日をいかに生きるかを教えられた教理である。

本逸話は、藤吉が「心一つ我が理」（「おさしづ」明治 22 年 6 月 1 日）を自らの信仰生活のなかで徹底して行っていたことをも示している。藤吉が追剥に出会ったとき、ふとかしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えが浮かんだ。「どうぞ、お持ちかえり下さい。」という言葉が発した藤吉の心境としては、人間が所有している物はすべて天の与えであり、自分の身体をはじめとした持ち物は、親神の十全の守護によるものであるという思いがあったのだろう。

『天理教教祖伝逸話篇』に収録された藤吉にまつわる他の逸話からも、藤吉のかしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えに基づく生き方が記されている。追剥が「余りの素直さに、薄気味悪くなって、一物も取らずに行き過ぎてし」まうほど、藤吉の心にかしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えが治まり、日常の行動で自然と現れるほどに体現化していた。教祖から「よう苦勞して来た。内々折り合うたから、あしきはらひのさづけを渡す。受け取れ。」と、ねぎらいの言葉がかけられ、さづけの理が渡された。藤吉が道を通るうえで様々に苦勞を重ねていたゆえに、教祖からねぎらいの言葉とともに、さづけの理を渡されたとも考えられる。

天理図書館に所蔵されている藤吉筆の『十二條釈義』には、かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>に触れながら、「みかぐらうた」が説明されている箇所を見出すことができる。藤吉の悟りによると、陽気な心というのはたんのうの心遣いであり、たんのうの心遣いを知るには身の内かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>を知ることが不可欠である。人間の身の内が親神からのかりものであることを知れば、大きな財産も自分のものではない。また、社会的に上層にいる者も社会の底辺で難渋な思いをして暮らしている者も、同じきょうだいであり、困っている者を放っておくことはできない。周囲にいる人々を思い、気にかける心だけであっても、親神はその心を受け取る。

本逸話からは、藤吉がおたすけを通して、天の与えとしての親神の守護に感謝し、かしの・かりもの<sup>ごうりき</sup>の教えを心に治めることで、親神の思召に沿う陽気な心で生涯を送ったことを読み解くことができるのである。

## 比較思想学会第 51 回大会が本学で開催

金子 昭

6月28日・29日の両日、天理大学2号棟を会場に、比較思想学会（会長＝中島隆博東京大学東洋文化研究所長）が第51回大会（天理大学大会）を開催した。比較思想学会は1974年に創設され、広く哲学や文化や宗教などを相互に比較し、学際的に探究することを目指す学会である。我が国の比較思想研究の草分け的存在である中村元東京大学名誉教授が初代会長を務め、以来半世紀にわたって学術的な活動を展開してきた。

今回の天理大学大会では、島田勝巳副学長が大会実行委員長を務め、私は大会責任者を担当した。両日も午前中に10本の個人研究発表が行われ、午後には「宗教文化と比較思想」及び「聖地の思想」という2つの公開シンポジウムが開かれた。シンポジウムの部では、会員や一般の参加者のほか、本学の学生も多数参加して熱心に聴講した。2日間の参加者実数は190名以上に上った。

1日目のシンポジウム「宗教文化と比較思想」では、本学の東馬場郁生人文学部宗教学科教授が「きりしたん受容史から見えてくる宗教文化と比較思想の課題」について基調講演を行った。東馬場教授は、最新の比較宗教学の知見を紹介した後、きりしたん受容を事例に宗教文化の比較研究の課題を提示し、その上で比較思想の方法論について論じた。それを受け、頼住光子駒沢大学教授が「三輪山神婚譚をめぐる比較思想的考察」について、また酒井真道関西大学教授が「インド仏教における対話—その意味理解と位置づけ—」について、それぞれパネリスト発題を行い、その後、参加者を交えてパネルディスカッションを行った。私はコーディネーターを担当した。

2日目のシンポジウム「聖地の思想」では、パネリストとして3名の研究者が登壇。加藤みち子武蔵野大学特任教授が「聖地としての紀伊半島」について、中山郁皇學館大学教授が「聖地を拓くということ」について、そして本学の岡田正彦宗教学科教授が「宗教都市・天理と『ちば』」について、それぞれパネリスト発題を行った。岡田教授は、聖地「ちば」が天理教において人間創造の元の地点として独自の意義を有することを紹介し、天理という宗教都市がどのように形成されてきたかについてスライドを用いながら説明した。その後、参加者を交えて質疑応答が行われた。コーディネーターは、板東洋介東京大学准教授が務めた。

## 天理台湾学会第 33 回研究大会が本学で開催

金子 昭

7月6日、天理大学研究棟第一会議室を会場に、天理台湾学会（会長＝山本和行国際学部中国学科教授）が第33回研究大会を開催した。同学会は、1991年、天理台湾研究会の名称で発足し、天理大学に事務局を置く国際的な学会で、例年、天理大学を会場に研究大会を開いている。今回は台湾からの参加者を含め、研究者や学生ら約40名近くが参加した。

研究発表の部では、4名の研究者（内3名は台湾から参加）が発表した。その内、本学からは中国学科の今井淳雄准教授が「0403花蓮震災をめぐる日本の支援活動」と題して発表、今年4月に発

生した花蓮震災をめぐる日本の公的機関による支援活動について詳しい報告を行い、その際、私がコメンテーターを務めた。

講演の部では、三濱善朗元天理教台湾伝道庁長が、「戦後の天理教台湾伝道史を振り返って—その歩みと今後の展望を語る—」と題して記念講演を行った。三濱元庁長は、戦後初めて台湾伝道庁長として赴任した時の体験や現地の信者の歩みについて語り、また天理大学が学術交流を通じて果たしてきた役割についても強調した。

## 第 6 回 EASSSR（東アジア宗教科学研究会）年次大会に参加

堀内みどり

標記大会が7月6日から8日にかけて麗澤大学を会場に開催された。本年度のテーマは「Religion and Morality in The Global East」（グローバル・イーストの宗教と道徳）だった。6日の基調講演は井上順孝國學院大学名誉教授による「Fragments of Confucian ethics in modern Japanese New Religions and Shinto（現代日本の新宗教と神道における儒教倫理の断片）」、7日の会長講演では櫻井義秀北海道大学教授が「Japan's Political Religion of Rent-Seeking: Changes in Politics and Religious Relations since the Murder of Former Prime Minister Shinzo Abe（日本の政教分離：安倍晋三元首相殺害事件以降の政治と宗教の関係の変化）」、また同日夕刻の基調講演ではAlan Cooperman氏（Pew Research Center）が「Levels of Religious Switching in East Asia: A Global Perspective（東アジアにおける宗教転換のレベル：グローバルな視点から）」と題して行った。8日は麗澤大学などの見学会があったが参加できなかった。発表者は、合計98人で、堀内は第2日目（7日）の第4セッションの1「East Asian New Religious Movements and the Harmonization of Tradition and Innovation（東アジアの新宗教運動と伝統と革新の調和）」のパネルで、「Religion and women in contemporary Japanese society: Has Tenrikyo guided women?（現代日本社会における宗教と女性：天理教は女性を導いてきたか?）」をテーマに発題した。

## International Conference on Indian Diaspora in Asia（アジアにおける印僑についての国際会議）に参加

堀内みどり

標記国際会議が7月18日・19日に、タイ・バンコクのMahidol大学で行われた。印僑は世界最大級の規模を誇り、特にアジアでは歴史的、文化的、社会学的、政治的、経済的に重要な位置を占めてきており、種々の世界変動にあってさえ、印僑という概念は、現代アジアに関する新たな学問の中で際立っている。そうした認識のもと、この会議は、印僑研究に関心を持つ研究者が一堂に会し、歴史、歴史学、政治学、国際関係学、言語・文学、芸術・文化遺産における彼らの影響と表現について議論することを目的として開催された。日本からは4名の参加者があった。堀内は、「East Asia」のパネルで、「New Indian Society in Japan: Indian Involvement in Contemporary Japan as Seen in the Activities of the "Edogawa Indian Association"」と題して発表した。発表者は約60名で、会議運営における学生の活躍が目立った。

グローバル天理

第25巻 第10号（通巻298号）

2024年（令和6年）10月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan